里見八犬傳

拾八編

四十八

709
100

南總里見八犬傳第九輯巻之四十八

東都　曲亭主人編次

第百七十九回

照文歸東して房總福を覓し
東西和睦して両國津を爾く

仁人仁を欲すれば仁あふ至る。仁外ふわゝび仁必其人ふ在義外ふわゝび義必其人ふ在求ると求ざるのこと里見安房守義成主博愛仁恕の心もて水陸の施餓鬼果しかゝ大法師を首ふて来會の大衆數百口次の日稲村の城へ召登されて。義成隨即對面あり。齋を賜り布施を牽る。其骨待淺からむ。各身の暇を賜りて咸其寺ふぞ返されける。是ろして犬江親兵衛も暇あることを沿て瀧田の城ふ久の來ろ。姥雪代四郎と共侶ふ。義實老候ふ見參して君恩の辱なを拜まつるどもめり。當下義實主々。親兵衛が京師ゆゑあり〳〵奇事。且今番の戰功の事の顛末又代四郎が三河ふ。苛子崎の賊難と京師

遠門 13
號 709
巻 100
明治三六年十月九日購求

ふとも親兵衛の帯助ふ做りーゆまをを摘詳ふ馨さをて甲しとるく听あふふ先上茶を賜り果子を賜り且饌をも賜りて終日ふーといまご飽ねば其次の日も次の日も只這老少両個をのこの召せるく長ち春の日の詞敵ふあるひろり。然び又直塚紀三ハ蛋崎の家ふかへて来ぇ則主人の女房ふ京師ふそありーるん固様ゑゑと戦るのこ曩ふ照文ハ犬江親兵衛を迎執ん為ふ二さび使を命せられて京師へ赴く水路ふて類の怪異ゆりーるハ往見古屋八郎景能の注進ふく其大槩を知られーのこ後の安危を知よりもるく今小至て信るけまべ。いくふくと思ふのこ胸安ららねば紀三ハも倶ふ額を病ゑめて慰め難つ過ち日の春いさづらふ暮んとも花落て若葉做も蒼山近く見る序ふ懐月ハいさ遥るる憂苦をやるかくるるりけり。有徳ー程ふ當春三月廿八日ふ蛋崎十郎照文が恙ゆゆ〜ゑ京師より。

帰帆の告ありーかを。義成主ハ欣びて両家老辰相清澄并ふ犬塚信乃大江親兵衛犬川荘介犬飼現八犬田小文吾政木大全杉倉直元ゑを召聚へて専他を俟るふ

程ふ。六の日照文ハ刀筆吏大岸法六郎と倶ふ夥兵伴當夫役们を領てかり来ぬる。其船洲崎の港口ふ果ーハ今朝已牌の時候るべ。是より路次をいそぐ。約莫三時程ふ夙く稲村の城ふ参ーかば義成則衆議聽ふて對面わり。法六郎も召ーせられく。照文と倶ふ見参ゑ両家老五大士ゑ侍坐ーて其言を听ぜらる。當下大江親兵衛ゑ君命ふあり我ゑ出て照文ふ向ひていはう。蛋崎生近曽我帰東の美ハ後ふ上ゑるべけれ。曩ふ遠江灘ふく和殿の船ふ類怪の憑ちけるよりハ故わりて既ふ聞召ぬ其美ゑ則箇様々々と田税戸賀九郎と古屋八郎ゑが主僕十餘名新井の浦ふ漂着ーて竟功わりー事の趣の其大畧を解示ーて和殿ハ亦何ゑの故ふ京師ふ久ーく淹留ゑる。帰帆の遅かりーハ甚麼ぞゑと問へば照文然ハい逸時景能のるハゑる臣ゑるゑ故わりて彼知りぬ。其美ハ後ふ凛上ん既ふ知ーゆ召れる那類怪の尼解けー時臣ゑが船ゑ西ゑ投て走るを一日一夜津の海近くるる。程ふ就風猛可ふ吹起りて檣を折り楫を摧ち船覆らんと

文淵堂藏

死ぬる者幾番といふことを知ねば人我生るい地なく波と風とに儘いて漂ふこと又二日一夜。風波やうやく歇りて我船は神風の伊勢の阿曹に寓ひけり。その地は則伊勢の國司北畠殿の封内にて陣頭網曳平太夫周魚と喚做す者の沙汰さて半死半生なる我ども主僕を浦の守屋に扶容させ。醫師并に漁夫等に課せて看病等怠なく一個一個に湯掖を薦めて勦り丁寧なるにはいとかたじけなく我身夫役に至るまで死ざることをいふとも。船に金子と方物の最多くわるを訝りて周魚悄地に思ふやう他郷に相告て安房の里見の使臣なりといひは必詭言にて實も海賊なるべしとて敢て一人も漏さとゝろく緊しく牢舎に繫措せて来由を國司に訟けり。然ば是等の穿鑿に去歳は果敢なく暮んとせ。有徒一程に扇谷山内の両管領諸侯を連ね兵を合せて館を攻伐ぬるの風聲那地へも傳へ聞かば臣等はいよく胸安からじ。いざ身を免れて徑に還りて御先途に逢ばやと思ふのこと計の出る所を知ねば只管館の御印章に修善寺紙を含ませ。網曳周魚に示しつゝ里見の使臣なる照据に做せども北畠家と一ならぬ書札の往来なるに故に周魚は其をも信とせず放ち還さべくもあらざりしに其頃北畠殿は東国戰孰まで敗軍の艦海を渡りて這地に来ぬるもわろし欲とて海邊の戍りを固くせろ且間諜児を武藏と安房に遣して両敵の勝敗を備に知まく欲しと今茲正月下浣件の間諜児毎に多氣の城に入りて両管領敗軍のさまの趣をいとくはしく大阪犬村犬山に赴きを走りて武藏に渡りて五十子新井大塚忍岡の四箇城を輒く捕さる事の顛末又行德國府臺の戰に我御曹司を首として犬川犬田犬塚犬飼の武勇智計をのゝ敵將多く虜にせられ山内頭定主と扇谷朝良主千葉長尾の敗北まで具に注進せさるとゝろの事の便宜は是のごとくにて臣等ら去歳の初冬に京師へ使を命ぜられて船路を西へ赴かるる其秘事さへ間諜児ら捞ぬ知る據ありけん。都北畠殿へ告禀せしのみの後に知られけり是によりて始より臣等ら言の

文淵堂藏

偽詐るゝね拭ふ迄ふ悟られけん。周魚ふ見せる御印章をよく認る者あり。かゝいふく那里の疑ひ解けて北畠殿下知まゝ。里見い原是南朝の忠臣ふて我先祖と同義烈の好あり。今八山海千里ふ分据えぬまゝ疎洞胡越ふ似ゝまゝども其家臣る者の渡海幸るく破船して我封内阿漕の浦ふ寓りしを及て疑ふて禁獄久くるまゝふ留め措しを去慙られ戻く異船もて其投方へ送り遣もべ者ことあり。かゝ網曳平大夫周魚奉りて臣ゝる主僕を牢舎より扶け出えつ勅りて國司の仰信々と事の情由え解ゝ示えつ則巨船一艘ふ所持の金銀方物まで一箇も遺るく返し載く且舵工篙師十餘名を假し如え船出を風ふ儘される深切ふ同ドかるねば臣ゝ欲びつよゞうもわゞ且肚裏ふ思ふ我君天の資ふよりて水陸の大敵咸敗績しと房總国異の安えるふ今さら這里より船を返し安度いえい要るえ所行るり。然ゞとて大江ち既ふかへり参りて國府臺の戦ふ奇功あり

とつふ。ふも亦ゝ乳の兩謀児ゞ國司へ注進せしゝ空ぬ然らば京師へ赴くとも。是も要るえ事るべいふせまし。と分よりもるく左さま右さま尋思をえぬれば。究竟の一芸るえふわゞ。ふの折をもて京師ふ上りて両管領の暴傲も大兵をもて我君を伐滅さまく欲ゝる。鬪戰の顛末を室町殿ふ告奉り天朝の奏聞を経て調貢の金子と上宣を公武二庭ふ献らば我君忠恕孝順る年來の御仁心ふの時ふも顕れて室町殿ふも朝廷ふも其私る誠心を知ゝ召るべ後々まで資尾よろゝぶ。と思ひるく法六郎ふ恁々と意衷を示しつ國司の思芸を網曳周魚ふ謝し。且別を告て我主僕數十名一人も恙あるゝ。那巨船ふうち乗て纜を解く旦用の順風ふ西を投てゞ走らせる。恁而二月の初旬ふ至りて船浪花津ふ果しかべ隨即那津ふ旅宿を投めて。阿漕の船も船工篙師ゝも俱ふかへ遣しつ却我伴當の心利るを。両三名悄地ふ京師ふ遣して事の便宜を拐らまるふ

當春京師の管領政元主に故ありて罷られ畠山政長主一個管領となる。また亦幸あるに似たり。因て大岸法六に機密を示し心腹させて那御印章ある紙を用て室町殿へ進らせ奏上書一通と奏啓の上書をさく形の如くに書寫させて調貢の黄金土宜を目録に合せ配當して長櫃幾箇に藏めて支役に早せ京師に上りて去歳の秋相識れる客舍を宿とす次の日大岸法六と倶に朝服を整へて伴當夫役を從へ室町殿へ參上るに法六郎を副使とす。田税苫屋の両人も那類怪の故をもて遠江灘に相別れて御使に人足らねば徒而臣ると法六郎等に管領政長主に就て先館の御書を進らせて且禀もらく寡君義成年来仁政を布施て民を撫國を治めて敢隣國を犯さとらず常に上を敬ひて調貢の礼懈るとあらず介るに関東の両管領定正頭定其政公ならずして叨に私怨をもて諸侯を連れ兵を合せて義成を伐まくす。義成素より罪なくして罪を連帥に沼て脱る路なく房總偏小の士卒をもて三路の大敵を防戰に勝ことを沼て水に臨む數千の戰艦を燒滅め陸に數万の大敵を敷き走せ寄る。是併蔽藩の八犬士犬阪犬塚犬村犬江犬山犬飼犬川犬田なと呼ばる者の智計武勇によりて三大敵既に迹を埋めて水陸の路開けぬ。使臣蜑崎十二郎照文大岸法六郎澄妙等をもて隨即微功を訴まつりて黄白方物を貢進す。願ふに冀く御制度ありて両管領の暴を禁めたまへ。東國の大小名和平して國民塗炭を免れるべ。獨義成の欲びのみならず八箇國の良賤男女咸柳営の御武德を仰まつりて家舞戸詣置酒して太平を樂むべ。その義を以て穏便なる。御下知をこを願ひけれ是則義成が呈書に載せる所陪臣照文等が意見をもて禀をかわるぞいなで宜く御亮査あらまくすべうのみなれとおそるく愁訴とも則室町殿足利義滿へ一千金東山殿義政へ一千金管領

政長及當時の権家伊勢氏を首ゐて黄白の贈ものあり。土宜方物も形の如く。數を盡して使札の礼とも。政長則其礼を容く。且いふまう。東國兵乱のゆゑも上ゐも既ゐ聞食て驚嘆し思召す所こ房州の愁訴実ゐ是其理あり。剞又貢進の礼屢ゐて。忠誠を表せらる。今さら何ぞの疑ひあらん。さの礼を備ゐ給へ上意ゐ依らん旅亭ゐ退りて御沙汰を待ねと。心て照文ぞを返けり。却照文ぞを返留の間ひ摂ん録へも廻勤して。朝廷へ貢を献り搢紳家へ人情も先例ゐ有て漏さるゐ。介程ゐ室町殿ゐ那訴を聞食て。管領并ゐ評定衆を召聚へ詮議あり。里見義成ゐ是謹慎の君子ゐく。貢進の礼両三番ゐ及べり。是ゐ有て之を親れば今愁訴する所情願忠礼を知るゐ足り。ゑられども子路ならぬ者の。片言をもて孰うゐ。訟を定むべき。風く間諜児を。武蔵と安房へ遣て。那両敵の善悪邪正を探らせゐふべくもやとゐ。衆議一決ゑうゐかゐ義尚則政長ゐ課せるゐ。政長是を兼りて退りて躰く間諜児を東へとて遣る。偖而三月の初旬ゐ至りて。那間諜児ぞかへり来て。定正顕定両管領の非礼を告る事具ゐく且我館の御仁心并ゐ八犬士諸勇士の。武略戦功大義の一伍一十を。ぞるゐ隨ゐ稟上ゐとゐ。さの礼も後ゐ洩ゐ。然ば室町殿ゐ重て詮議を遂られて。褒貶賞罰の制度ありけん。照文ぞを管領邸へ召よせて。政長則上意を傳るゐ。這回房州の秋心訴。既ゐ其実を沿う。あをもて御使を東國へ遣されて。定正顕定を御譴責ありて。房州と和睦仕るべ。貢を御下知あるべ。汝ぞは御使の郷導を仕りて。俱ゐ東へ退りねと。御教書を遞與されゐ。事の便宜ゐ是のことゐ掛向ハ最も畏き天朝ゐも。我館の御忠信とへ八犬士の大功を感思召よりありて勅使遣さるべ。と仰えけり。是ゐ有て秋條將曹廣當を勅使代ゐ做されて室町殿の御使熊谷二郎左衛門尉直親と共ゐ伯ゐ安房へ参向さるべ。と。介程ゐ件の

両御使秋篠廣當。熊谷直親い伴當を多く領て。三月十二日ふ啓行て。岐岨路より。先上毛ふ造らまくも。這時山内顕定ゑ上毛沼田の城ふ在り。又長尾景春い同國白井の城ふ在り。又扇谷定正い武藏ゑ入間の河鯉ふ在城まとい。其皆え紛まゑけまべ。那三將ふ上意を示して其罪を譴め以後を儆め。羕服和平ふ至ほの日両御使ゑ其家臣ゑを將く。水路を安房へうち渡て。上意を伝ふべーと定めらほ。是ふ依て照文ゑい上毛より両御使ふ相別れて。那敵城へ立ゑべ。登時熊谷直親ゑ照文ふ示ーてい。汝い夙く安房へ退りて。その羕を房州へ伝ふ。又武藏相摸ゑ。新井五十子忍岡の城ふ向りとゑ。三犬士ふも告ーて。退城の准備を做さえむべーとある。中途より犬の指揮ふ儘せく。臣ゑい法六郎と俱ふ伴當夫役を從へく。昨日五十子の城ふ走つ。件の首尾を天阪毛野ゑふ告ーかゑ。毛野ゑゑ欣びよ。ゑうゑわべ。躰て忍岡と新井の城へ使をゑて。道節大角ふ伝達まとい。他大塚石濱の城ゑ。登桐三八郎良子。小森但一郎高宗と穂北ゑ。落鮎餘之七有種ふい。別ふ使をゑて必通達まべーとい。毛野又照文ふ談ぎらく。室町殿の御威德ゑて。両管領羕服せべ。那御使秋篠熊谷必當城ふ未着ーて。水路を安房へ渡まゑべー。其折我亂智い両御使の案内ふ立く。稲村の城ふ向かり参りてん。和殿い夙く帰城ーてい。犬の羕を館へ告まつりねまい。犬の余の人人恁々と。後の進退を解示ーて。酒飯を羕めゑどまゑ程ふ。日い暮て順風なりけまべ。柴浦ふ維せゑ。船ふ臣ゑを主僕を載て。波の上安らゑふ通宵走ゑ風のまゑく。洲崎へ帰着ーけりふ。と言詳ふ告禀せべ。義成主を首ふて。親兵衛自餘の四犬士三家老憶ぎゑ。皆ゑち笑れく。奇也々と稱賛ゑ。开ゑ中ふ義成主ゑ。特ふ怡悦ふ堪ぎゑ。わりけん照文を身邊近く。找ませて宣ふ。料らざりける汝の操行。是第一の奇功。犬士ふ伯仲ゑ。といふとも。過ぐりとまべらむ。現ふ禍福い糾ふ纏の

如。約莫倚伏の至る所事塞翁が馬るらねハる。初我照文ゐ使を課て重く
京師へ遣せハ仁を迎へ執せん為こ然るを仁を使を俟で。おのづゑゐかつ怠て且
葛西ゐて軍功あり。又照文ハ風難ゐ舩を破られ漂泊して阿漕ゐ去歳を暮しゆ。
去の春更ゐ京師ゐ上りて我為ゐ一由計り沼て大敵和平の時宜ゐ造るハ是我
素懐を果せる所以其績拔萃るゆ。勸賞ハ異日ゐわらん。是を當世の褒美ゐとて。
急ゐ傷を見かりて刀架ゐ措れる。刀を子づゑ合を揚て卒とそ是を與へゆゐ照文ハ
阿とたゆりゐ。膝行頻首受戴きて去そ過分ゐ御賜鄙語云衍恣の功名ゐてそいゐ。
冥加ゐ餘る畏さよと凛ゐつ些退ゐて却二家老と五大士ゐ君恩を謝ゐける。當
下太岸法六郎も御目前ゐ召出さるゑ。先ゐ照文ゐ従ゐて副使をよゑ
とて。褒賞の詞を賜りける。甲乙面目身ゐ餘るを清澄さこそと執合ゐて。且
いよゆう。去歳の冬照文を京師へ遣さる時呈書を齎せゆゐ吉凶料りかさ

けるべ那地ゐ到りそものせよとて只素楮ゐ御印章を做されて渡ゐひゐ法六郎さへ
附られハ後の便宜ゐ做りけるを。神ゐ敬ゐ豫より。知るよゆゐ紀とゐハ
辰相然へと応へゐ。少くゐ如ゐそ阿漕ゐて。那疑を解ゐるも。御印章ゐ
て。又京師ゐて延蟹崎ゐ思ひの隨ゐ計り沼て。御書を自由ゐ寫せゆゐ御印
章ゐ故るまゐ。其妙さゐ知ゐべゐ。と譽まゐ信乃も親兵衛も共倍ゐ
うち點頭く。事皆人意の表ゐ出ぬる。十一郎の揣る所術ゐく事の整ひゆ。
是我君の御盛德と伏姫神の冥助ゆゐ。左ゐも右ゐも延蟹崎生の全功ゐ
てそいゐれと執合ゐまゐ莊介現ハ小文吾も感ゐて己ゐ。現ゐ延蟹崎の新智玉ゐハ
必ゐ犬阪も一階を讓るべ。と稱く笑局ゐ入ゐ。照文ハ額ゐ汗ゐく。當り
かゐと謝ゐける。當下義成ハ又照文ゐ課るゆう。汝ハ疲労ゆゐるべけれど徑ゐ
龍田へ罷歸りて。京師首尾を老館ゐ侍と告ゐまゐさゐる歟ゐべけれ我亦

思ふに那御使の来著まで猶數日の暇あらん。法六郎も宿所に退りて後の勤に就べき者ども辰相清澄這意を沿く。宜く他をも勤るべ。と例の仁慈を示しぬべ。大家いよ〳〵感服して。その日の席に果てゝ是よりして稲村の城内に京師の御使を管待の准備遑なく旦暮して十有餘日を歴ぬる程に。有一日五十子の城より犬阪毛野が快船の使に消息を齎して。両家老五犬士等に報るやう。這回参向の勅使代秋篠生并に室町殿の御使熊谷生は。両管領を御譴責の事果て。近日渡海の筈なり。両三日に過べからず。其御儲をいそがせぬ。亂智案内を仕らん。急急如律令とあり。かゝれば。義成是をうけて。両家老辰相清澄及信乃親兵衛。壯介現八小文吾等を召聚合て商議あり。且課るやう。那御使を立るとも。五十子は敵城なり。又在る所の浮宝は。皆是戦艦なるべ。其弓矢なる物を。もて那人々を迎んは不敬なり。その故に親兵衛と照文を。洲崎の浦なる巨舶五六箇と。士卒一百五六十名を招く。那御使を迎ふべ。又信乃壯介現八小文吾は這回の饗應使とて。六郎兵庫助もその意を沿て。旨を照文に伝ふべ。又毛野が使ふは回翰を含らせて。その意を沿さまべ。事忽緒にもべからず。と捉ていそがせぬ。ふぞ大家都てあるに沿て。次の日親兵衛と照文を。准備の船を找めて。士卒を招く。早天より柴浦を投ていそがせる。是よりの後幾日もわらぬ時に四月十五日。京師の御使秋篠將曹廣嵩。熊谷二郎左衛門尉直親は儲の船にうち乗て。洲崎の浦に来著も。従ふ伴船五六艘。犬江親兵衛。蛋崎照文は。別船にて先に找ぬ。犬阪毛野は後に従ふ。這三士の従者も尠らず。既に港口に造りて。有司地方の小吏人們出迎へ。前駈して稲村の城に案内ぬ。儲の旅館に詰待て。饗應使犬塚信乃。犬川壯介。犬飼現八。犬田小文吾。助役政木大全も。両御使に拜謁して。欵待大賓の礼を以て。毛野親兵衛照文は俱に

義成主の身邊ゐ參りて。報禀を義あり。義成いよ〳〵欣びて。大敵既ゐ来服の笑ふある。両御使来臨を恭くを。對面ハ必明日なるべし。ゑらんゐ今宵我々〳〵あゐ留在らせる。滸我殿以下の敵將等ゐ對面と。愚意を示さぎゐわるべからぎ。先這一義を急ぐべ。と詞委るく吩咐のゑべ。毛野親兵衛照ハ文等ハ敢異議く言兼て。退りて辰相清澄と。信乃。壯介。現八小文吾。并ゐ政木大全等ゐ旨を傳へく共侶ゐ事の准備ををうけ。偖而成氏憲房。朝良。朝寧。自亂。為景。義同義武憲重亂。久盛實及由充ゐ至るまで。預りの諸士一箇〳〵ゐ沐浴させて新し紀衣裳を薦めるどを。成氏以下の囚徒を。這光景に胸安からぎ原来今宵我們ゞ首を刎ん為ゐてを。這管待を做もるゑめと思へども今さらゐ。人ゐ問べき由なけまべ。倒ゐ覚期を究め。他等ゞ隨意せざるハなし。偖而夕饌も果しかぎ。又給侍の諸士ハ成氏以下十二個の敗將を請ふく廣書院へ遷しけり。

當下犬塚信乃。犬川莊介。犬飼現八。犬田小文吾。犬江親兵衛等皆礼服ゐて出く来つ。俱ゐ恭しく。席上ゐうち向ひて。信乃がいはく。滸我殿以下の諸君ゐ造るる。寡君義成の口狀ゐ。久しく旅館の御徒然を慰めまゐらるよしもあく。對面の義ゐ及ざりしハ素より是故ある事ゐく。義成の本意ゐゐらず事ゆゆくゐ便宜をゐるまべ。今宵見參ゐ入らまく欲も先這義を造禀せとある。君命ゐとそいなれ。といたまく成氏以下の敗將ハ生心して恥る色あり。ゑの時席上ゐ燈固とゐるく建列ゐる菊燈臺ハ灯花の色を増て皇裏如く明けまべ。照る金屏の後より。里見安房守義成主其子太郎義通と俱ゐ立烏帽子長袴ゆく小刀を腰ゐ跨て出て主坐ゐ著るハ両家老辰相清澄并ゐ杉倉武者助。姥雪代四郎及満呂復五郎。郷尚ゐ行德より召復さまて俱ゐ相従ゐて席末ゐ。ゑの餘満呂再六郎。安西

十二敗將
稲村の城ふ
幽せらふ

就介。磯崎増松が或い両主君の大刀を執り。或い手燭を秉て扈従しく後方ゐ侶り。親兵衛と荘介が這席の奏者めて主ゐ向ひて諸敗將の姓名を通達せ。義成是をうちく叮て。找こて件の人々ゐうち向ひて名對面の礼正しく且いふやう。諸君いよく恙まさぞや。義成不慮ゐ罪を両管領家ゐ沼ぞしまり。料らずも水陸の鬬戰ゐ八犬士やるゞ防禦の備ハ及ぶ勝ゐ衆ざるとを。竟ゐ諸君子を屈請して當城ゐ留め住るゐ是豈義成が情願ならんや。爭何せん両管領ハ敗軍の後跡を埋めて。和睦の議ゐ。其家臣ハ守る所の城を棄て走りて其往方を知せず。諸君を迎食らまくする者一人も是なるを安ねへ。只ゐ今日ゐ至れるを思ひかけもなく。京師より両御使ゐ一個ハ勅使代秋條將曹廣當一個ハ室町殿より遣されるゐ熊谷三郎左衛門直親是ゐ今日も藏潘ゐ光臨せらるゐいまゞ對面せざれども。ゆくゐ和睦の一議ことゐり。義成苟も居ゐがら勅諭と台命を兼らんゐ武門の面目冥加ゐ餘れる。欲び何者ゐ是ゐ優ぶべ。ゆゑゐ折を見て諸君子ゐ意衷を告まく欲ゐる故ゐ推て見參ゐ入りゐひと。口誼ゐ羨しる成氏憲房以下の敗將応難く阿とたかりゐ言詳ゐらざれば。大石憲重原胤久ゐ。るく席末より。找こ出て答るやう。今ゐたゞめね御懇命。我们主僕十二名俱ゐ浮囚でありゐがら。坐しく食ひ温ゐ衣て。朝夕の安かるハ君ゞ博愛の餘因ゐ。仁者不殺の真心を感佩の外いつぞと執合もまば。成氏憲房朝良朝寧自亂も俱ゐ目屬の慈恩を謝して其寛仁を稱賛せ。義成是をうちやゞく。滸我殿い我大父季基の時より。舊交ゐ紀ゐわゞ又両管領の賢息達も。倘恁る湍ゐ遇ざりせば。いかゐして藪潘ゐ駕を枉らるゝよりあらんや。就く朝良朝寧主并ゐ主葉殿ゐ請まず一紀一議あり。といひく後方を見かれば。屏風の陰ゐ扣る。犬阪毛野と政木大全ハ俱ゐ礼服晴やゐ。出て席上ゐうち向ひて仰き見つ頻首せり。登時

義成主も。先自亂ゐ告るもう。千葉殿。這壯佼を認りゐ入りゆ。是も此
藏藩の軍師犬阪毛野金碗亂智是こ。其素生を原るゐ貴藩の忠臣
と。ゆえる。栗飯原首ゞ遺服の子こ。餘事ハ他ゞ口中ゐわらん。亂智找こと
見參せむゆ。といまとて毛野ハ阿と応て恭ーく自亂ゐうち向ひて告るもう。
言新ーくいへども。臣もゞ父栗飯原首ハ原是千葉の親族ゐて。君ゐ仕へく
私るく。常ゐ諫を呈りて。安危を未然ゐ計るものか。佞臣馬加常武ゐ說く訴
せられて剩龍山縁連ゐ殺されーを。常武猶も說く言ーて。臣もゞ嫡母兄女兄
さえゐ慘刻誅戮せられう。臣もゞ母ハ父の妾ゐて那身ゐ遺服ありけれ。難を免れ
辛くーて相摸の國足柄の山脚るる犬阪村ゐ潛て居臣もゞ成長ゐ及ひて父の枉死と寃
家の上を言詳ゐ說示ーて幾程もるく身故りゐ。是よりの後一日も臣もゞハ復讐の志
移らむ。假少女子ゐ身を做ーて。倆妓且閑野と喚れう。竟ゐ馬加常武ゞ酒宴の席ゐ

招きて。當晩寃家常武と一家の主僕を。屠ゐーて。垣を乘て。ゆる程ゐ這時まで。宿
世ある。義兄弟ゑ知ざりー。犬甲小文吾悌順ゞ常武ゐ禁錮られて別室ゐ在りーを。竊助
ゐーて城を出ハ。船ゐ乘りて別ーて他郷ゐ走りゐ。又那寃家。龍山逸東太縁連ハ。後
扇谷殿ゐ仕へ。五十子の城ゐ在り。去歳の冑月の下浣。相摸へ使を奉りて那地へ啓行せと
。ゆえ。かバ鈴の茂林邊ゐ埋伏ーて。其首捕て。親弟兄の怨を雪わ。ひゐ。ゆえゐ就く
偽聞の錯誤もいへ。いざ。扇谷の両公。達も。俱ゐ聞召わ。ー。臣もゞ後の復讐言へ。
便是。御家の忠臣。河鯉椎佐守如の汲ーゐ由れり。守如も。那縁連ゞ奸佞君を惑ハ
。るを。憎みて。除まく。欲る程ゐ。他ハ臣もゞ寃家。ゐるを。守知りて。其起行を報るのこ
當日。犬山道節ゞ。復讐言のゆわんとハ。夢ゐ。ゞも。是を知ず。臣もゞも。亦其折まハ。道節と
相知ず。事ゐのゞ。合期ーて。扇谷殿の道節ゐ。逐れるひーのこ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。五十子の城へーゐ
犬塚信乃ゐ。接れ。ゞ。縁連の黨人ハ。守如謀叛ありと。諸くいゆく。君を惑ハせーゞ

憐むべし。守如と鮮書前さへ身を措難く。倶に刃に伏ひたと世の風聲に伝へ。
臣等は是過世ある八個の義兄弟を後に悟りて共侶に近曾當家に仕へ
より。皆用ひらるゝに浅からぬ。既に微功を成といへども臣等は水軍の隊の長なく
君が御隊に向ざりしは是切もの幸といひて惑を解せひて佞臣常武縁連が奸
詐残忍の酷かりけると首が忠誠鯁義に枉死の王と石とを分ちたる死後に
賞罰の御沙汰わらび善政枯骨に及といへん。這義を訟まゝに為に憶ぬ多
辯に做りいたと報る誠に感激の目皮の露に知られけり。當下大田小文吾も膝を
找めつ額衝たる頭を抬げて自胤にうち向ひて且いふう曩に浅草野邊に
志に料らぬ見参に入りし後のゆを文禀解ぬかの折君に知られまゝりて然も恩
遇ふにふゝねど逆臣馬加大記常武が拄へて私宅に抑留めて悄地に他が逆謀の
帮助ふせまく欲せを某緊しく説破りて其非を舉て寄めかば常武陽ゆへ

従へども是より言の洩れりやせんと怕きく躯て某を別室に閉籠て久しくなるまで
放ち遣らぬ。折〳〵常武が賀席に出て肇て對面をする倡妓旦用野と假少女なるを
知らぬ他が復讐の後に迄に迄に奇に過世ある義兄弟なるべきを悟れども言
盡さに遑なく。但其帮助に儘せて他郷に走りに遊莫君が御内に常武が餘黨
多かれば猶胤智と某を誣て云々といひもわゝん今又見参の折をまく胤智と
共侶に舊冤を解まく欲も。這義を思ひ召されぬと言爽に辨ぜれば自胤に聞く
事毎に恥て身を措所を知らぬ赧然さて答るやう大阪とのひ大田と云我に由縁の
あり行るを我愚にして用ることを知らぬ反て今日まで常武なるが奸詐逆謀を悟るに
由なく剰這回両官領の催促に従ひて俱に敗軍の辱に遇けるを口後悔の外なぬ
尚幸に和義成て城地に還ることを成て使札の往来を饒されるば教を乗まく願に
のこと謝まるを義成うち安て千葉殿恁思ひなば只胤智悔順のたびのこと。

我も亦いかひありて本意ふ稱ふて最芽出さ。就て又扇谷の両公子ふ請まくわ[illegible]義あり。御家の忠臣河鯉守如ゲ獨子ゑ とゆえる河鯉佐太郎孝嗣ち。鄉ふ姓名を政木大全と改めて今這席末ふ在り他ハ刑餘の人なれども其罪ふあらずとゆ。いで御目を賜りねと引合されば孝嗣ハ我を岩く朝良と朝寧ふ。ゆち向ひ額を衝て。姑且て禀もう身の非を飾るふ仕れども臣ち両家ふ在り一日ハ只忠孝の二をもて仕へまるの外わざりふ説者の為ふ誣られて。竟ふ死刑ふかこるハれ。白刃頭ふ落む折。靈狐の冥助ふ[illegible]て不測ふ必死を免かれて。旦大江親兵衛ふ避迫の欽びあり。それより後ハ間様々如此多の事ゆて親兵衛ふ從ふて素藤對治の首より。這回又親兵衛の恩義の為ふ葛飾の鬪戰ふ義通君の先途を援て。強敵長尾景春を防ぎゆるるの尾まで其崖畧を陳ていよう。是ハ此冥恩義ふ報ハんのこ。身の薄命を見かれば。栄利を求むるふ意ゆを愁ふ大士ゆるの

薦めふより。里見殿ふ知られまゆりて竟ふ亦脱ゆ路ゆ。昨今仕へて一隊の長の後ふ[illegible]ゆれ然ととも。今ふの時ゆくべいふて両公達ふ見参を饒されんや。禀も義を悟らせまゆて御歸城の後老館定正ふ仰上らるゆわば臣ゆ完屋の罪解けず身の幸のこゆ。亡父も冥土黄泉ふ[illegible]ゆ。さる歎びいめ。這義を願ゆると請へば亦親兵衛も我ふ必々朝良と朝寧ふうち向ひて。烏滸がましくいへども我ハ禀義ゆ義あるを笑ゆ。孝嗣ゲ死刑の折。能大刀自ふ形を変て根角谷中二ゆ憑ふ志々。旨く那死を救ハ一白狐ち。孝嗣の母ふ受ゆる恩を報ん為の所行ゆるよりも。後ふ備ふ知られゆ。ふの頃某ハ故ゆて武藏ふ旅宿ふぬゆる程ふ豫ゆ知る孝嗣ゲ。完屋の死刑の痛ましさふいで来期を見まくやくて忍岡邊ふ赴ゆ。他ゲ必死を免ハ一時料りて其强弱勇怯を試ハて友垣を締ばふ。然を根角谷中二ハ。浅慮ゆる臆断ゆ。孝嗣を救ハ一ハ親兵衛ゲ幻術の致所とゆえ上さいよく 君故

惑ふ。と人の噂ふ侍えさう。夫幻術は魔法なり。仁人賢者の做もなるべうんや。某い姫神傳授の神藥をもて人の必死を起もなほ生かり。借問朝寧主も死を蘇生りい。我神藥の奇功なれども。那佞人們も亦誣て幻術なりとのひもせん。その義ふ[illegible]悟らせなば孝嗣が忠と不忠の神疑ひ解けべ。讒者の舌は劍ふ似さう。市ふ三虎を做もと紀。曾子の母をも欺くべ。怕るべ[illegible]ふいつふや。と憚る色なく解醒せず。朝良朝寧ふ[illegible]悟りて俱ふ呆るを半晌許。姑且て朝良のいふやう。家兄さいふ所ふ[illegible]。孝嗣の言誠ふ以あり。犬江が議論いよく妙こ。咱ら饒されて歸城せば。必よ親報。とゝべ朝寧も俱ふらふやう。曩ふ孝嗣が罪過のとは。親の讐斷なりければ我知る所なるねども。當時虚実を正もなるせ殺さべ。必後の世まで不明の讐を貽さんふ靈狐の冥助ふ。今賢君ふ仕るは則自他の幸こ相ふなるとは。応きもれば義成主。謝して且笑ふげふ。その義も亦易なり紀。却三浦殿親子の如は。坂東一の勇士なるふ大村大用礼儀が僅ふ三百の小兵をもて古況なる城を受合て主を當所ふ徙さ。成敗時運ふ由れるのこ。別又公助力をもて理義を破らず。其進退を敵ふ儘く。夏く士卒を害ざり。是大勇の致も所識者は必感歎なべ。且和殿親子。我當前の敵なるねば。疾ふも送り還もべ紀をいまゞ其義ふ曁ざり。我這意を知ゑめて後の好を修んとそこ今一要時の程なるべ。と慰められて義同。跡然として答るやう。示教の赴兼りはかくゝべと誘るふわねど。我力山をも抜くべ。只仁と義ふく敵しがたう。我倘古ふ置れぬ。和君并ふ大士なるの大仁大義を具ふ知らんや。孩児が為ふ後學ふ教べ紀といなれと。謝もれば義武頭を抬げて。向常ふ迂遠なりと思ひ。仁義の微妙を知りぬ。譬は雲と水なる如。所れども所は。拂へども去らず。然るを武勇負もふ愚なり紀。咳くを義成急ふ推禁めて。御父子の諫遜當りかたう。是よりの後交を結べとなるべ幸なるんとゝ紀。傷を見かへりて稲戸叟徒然なるうん。

和老ハ壯不小文五と舊六又あり。且這回行德口の開戰ハ他ものの報恩ハ我も粗少知りぬ。然れども猛く勇のわまり。深川ハ和老を赶稠る。滿呂復五郎も去ハ在り。弁を悄地ハ船をもて朝良主と共侶ハ迎合りしハ要めるゆへ陣没さ毫ゝと思へば。其作者ハ去ハ在り。とのひゝ毛野を指示せば由充ハ阿とぞ。アまハ心も果ゞ左見右見く。現ハ賢君の下ハ八行の臣まゝかり。由充ゞ不肖なる。我身一個の敗軍ゆゑねど。當日死ざるを怨とも。非如報恩の義を以首を接ゆとありとも。今さゝ何を面目ハと。越路ハ退りいかゞやと言蕭然ハ合ゆを。毛野ハさゝそと慰めく。其慷慨ハ理りゆゑ。かの折和殿の拯ふる。朝良主ハ腹殿の外孫ハ。はをハ當那君陣没わゞ。和殿も必命を殞さんまの故ハ我亂智先見あり。計りて當城へ迎へ今より。虜ハ做まゝ為ハわゞ是則壯介小文吾ハ代れる二度の報恩のことゝゝ壯介小文五も慰めて俱ハらゆゑ。稍戸主和殿節を

折ゝ自然ハ儘せく。身を敵城ハ置とゝども忠義ハ厥る所ゆゑ。其賢良の故をもて我君格別の眷待あり。是亦臣ゆゑが願ふ所。徐ハ歸北の行を俟て後の好を修めゆゑと。諭せば由充領くのゝ又のゆゑもゆゑりけり。當下義成主ハ憲房ハうち向ひて山内の公子。那駢馬三連車ハ奇妙ゆゑ死然けれども奇功ある兵ハ奇物是を破ることあり。和君の後れるハわゞ。曾般ゆ雲梯も墨翟ハ折かれゆゑさのゝゆゑ思ひ屈ーのひそと慰められて憲房ハ憮然とーさ嗟嘆ハ堪む。开らいをゆゑ。拙巧何ぞ負むハ足らん。盛實先生拘られて後ハ摠敗軍ハ做りーより。身も亦擒ハせられていまゞ親の安危を知ゞ。恁而在るゆ一日も千秋ハ異ゆゑ。這意を察ーのひねと謝をまゝ義成感歎と。孝ゆる哉若ゝ人未馬ーくいと譽れば成氏側より。然也々と點頭く。這子の如ゝ親ハ従ふ。衍心ハ似て衍心ハわゞ。咱ゆゑハ初國府臺ハて。信乃現八ハいまれー美あり。過ちを改ざりけ。過ち成

爭可いせん。悔さ及ばぬ多ぐ。只在村を恨しけれと陪話るとも義成推禁めく。君ハ貴人ゐして且舊好あり。那御行徒るかりせば。駕を藪藩へ枉られんや。憂苦を轉じて歡びと做しるえも遠からぐと慰むる詞も果ね折くゝ土圭轔りて初更ゐるゆけり。憲重是をうちゆゝて亂久盛實等ゐ目を注しく。找ミ出ゝ義成主ゐ今宵の對面を謝しているやう。有かこれまで御懇命。孰ゐ感悅せざるべき。既ゐ初夜ゐさゆ(べ華昏の暇を賜るべくやと。執合されば。為景ハ獨傲然とうち笑て。現ゐ敗軍の將ゐハ兵を談るべかゝず。俘囚の人ゐハ安樂を示もべくゝず。我言るれもさゐ故に不礼ゐハわゝず退りてんと。誘るを成氏睨へ禁めて。憲房朝良自亂等と俱ゐ謝義の詞を連ねて。主人の退坐をこゝかゝ義成ゞて敢さ強ず。現ゐ今宵ハ初對面ゐり。長談燭を續べれゐわゝば。復こそ見參もべけまとて義通と共侶ゐ。辭別して退れゐべ辰相清澄以下の衆臣各主ゐ從ふてうち連立て退散て登時預人等。妻く出て來て。成氏以下の十二敗將ゐ。請て臥房へ案内をもゐ。程ゐ信乃現八を成氏を送りて枕ゐ就せ。毛野ハ自亂を送り。政宋大全ハ朝良朝寧を送り。壯介小文吾ハ稲戸由充を送りけり。各所縁われ〻ゐの他齋藤盛實ハ憲房の伴ゐ立ぬ。為景憲重亂久ハ親兵衛と預人ゐ送られて各臥房ゐ入りゐる。

第百七十九回中

長編うち續をもて這回を終て上中下と題目ハ上ゐ見へる如且四十六の卷端ゐ追て附録目錄ゐ。これ者官此彼照ハ見べし

却説義成親子ハ其夜分成氏以下。十二個の敗將ゐ對面の次の日ゐ。京師の両御使ゐ拜謁して。勅詔并ゐ室町殿のム令命を兼るべしとて。ゐの朝勅使代秋篠將曹廣當と。旋使熊谷二郎左衛門尉直親を。稲村の城内ある正廳へ請待もゐの故ゐ犬山道節忠與と犬村大角礼儀ハ召れて昨日新井忍岡の両城より。各快船ゐうち乘りて。昨宵更闌て稲村ゐ參上も。

伴當僅に三十名に過ぎず。又那西城の田稅戶賀九郎逸時、古屋八郎景能、印東小六明相、荒川太郎一郎清英等。衆兵を率て是を守れり。

仝程に道節は。去歲の冬の水戰に射て海底に隊を失る。扇谷朝寧は流れて下總葛飾に。矢所河に造りし時、犬飼現八に拯れて。且親兵衛が神藥の即効ゆえ。甦生りつ矢傷愈て生拘児等と共侶に稻村の城に在りと雖知りて怒罵るとて大方ならず且いかう。館の慈善を旨とせに御軍令ありとても。射て墜さる敵の大將を救ひて活置るべ戰ざるに赤くとる。好々那奴が稻村に在る程は。非如義番召さるとも。我は沼のかどくと敦圍猛く發憤せ明相に諫められて。本城に來ぬれども。尚憤り解けざれば其詰朝先信乃が件の怨をいひ出て。云云と論ぜしに。信乃も徐に和解くらんかう。犬山并を理之那扇谷は。和殿の故主の寃家なりとも。去歲の春那頭鎧を射て墜

去て志を果せ。然ぞ去歲の冬の鬪戰は當館の御大事ぞ。我私の志を行ふべき時にあらず犬飼犬江は這義を知て俱に那死を救ひ。敢敵愛まるにあらねど。朝寧が折命終らば。後に和睦ありとても。猶怨を送さるべし。然ぞ後の患ひこれの義を忘れぬひ欲と解られて道節言下に悟そ寔に仝也仝也と。心を又更辨せず。是まりの後現八親兵衛と團坐する日のまられども這義を毫もいひ出ず。倘問人のある時は。并を去も他事に紛らして說誘るとなかり去るべ。信乃は悄地に感嘆して。哥々は理非に醒て惑はず。君子の風あり。こぞいひける間話休題。時に四月十六日。當早犬江親兵衛蛍崎照文。光絹衣麻社下ゆく。京家の旅館に伺候して。時分宜敷を報ずかば。勅使代番當諏使直親は。立烏帽子大紋の直垂に。小刀を腰に跨て出て。案内に就て去るべ。隨從の雜掌十余名。素袍烏帽子にて。大刀を執り。征箭を執れるも

稲村の城ふ
義成勅使
詔使を迎ふ

其二
ハ犬傳九輯卷四十八
二十一

ハ犬傳九輯卷四十八
二十二

○文溪堂藏

あり。各主ふ倶にくゆめり。恁而伊の両御使ハ引れく儲の席ふ近づく穆ふ。國守安房守義成主ハ嫡子義通と共ふ朝服ふ身を整ヘ三四間ぬく是を迎へく。正廳の上坐ふ請待を隨従の雜掌ハ廳の外廂ふ羅列さう當下這席ふ與れる。犬阪毛野。犬塚信乃。犬山道節。犬村大角。犬川荘介。犬飼現八。犬田小文吾ハ各礼服ふ。犬江親兵衛。蜑崎十一郎と倶ふ亦是外廂ふ。這他次の間ふハ東六郎。荒川兵庫助。杉倉武者助。政木大全。田税力助。姥雪代四郎。満呂復五郎。満呂再太郎。安西就介。磯崎増松。朝夷三郎。白濱十郎。七浦三郎。東峰朋三。鱆船貝六郎。大岸法六郎ふ至ぬまで皆礼服の袖を列ねて。伺候せぎとりふ者る。又義實老侯の名代ふハ堀内藏人ぞ。ありけ。ふの餘杉倉木曽介。浦安兵馬。小森衛門等ハ。致仕の老人なれば召れむ又天津九三四郎も是ふ同じ。各其宿所ふ在り。又堀内雜魚太郎ハ。鎌倉ふ在陣む。又小森但一郎。浦安平助。千代九圖書助。木曽三介。小水門目。音音如。真曳。ふ單節。桜岡猿八。鏡内巣四郎。ぬハ五十子及大塚の城ふ在り。印東小六。荒川太郎。一郎ハ前ふ見へさう。又登桐山八郎。ぬ石濱の城ふ在り。落鮎餘之七。ぬ穂北ふ在り。又真間井撥二郎。継橋綿四郎。閏鷲手古内振照。弘教三四的。寄合五郎。須々利團五郎。ぬハ國府臺の城ふ在り。鳥山真人。ぬ岡山の壘ふ在り。石亀次團太。越鄭三ハ行徳ふ在り。又楯持鎌杖。大樟村主ハ既ふ身の暇をぬりて其本領ふ在り。又直塚紀二六。大江屋依助。ぬ有功の者るれども。他ぬハ蜑崎ゲ家僕ぞ市河の町人なれぞ。ちふ數ふべくもあぞ。向ふ五十三人。技獨鈷素ぬ吉ぬ。是ふ同じ。省官是を思ひねか。却説熊谷直親。義成ふ向ひく。房州將軍家の御諚ありとゝ。義成阿と心ぐ。膝を找めて拜聽ぞ。直親大紋の袖掻合せく。抑舊冬兵乱の時。其基本を原ぬふ。扇谷定正ハ聊ぬる怨ふよりて。山内顕定と。近國雷同の兵を連ねて

安房上總を伐つゝも其戰破れより。東國いまゞ靜まるべし。這度既に京師に攻入て。
上の御心安からむ。内々詮議を遂らるゝ所。定正頭定の非理分明なるの故に我直親を
御使に做されて。御譴責あり。直親則上野沼田白井及河鯉の城に發向して上意を
偽へて其罪を責るに。定正頭定長尾景に至るまで各其非を後悔ゝ稟
解くに詞るゝ。罪過を恩免あるべし。里見義成と和睦して東國太平の功を奏せ
ゞ。但定正頭定の兒子及合戰の諸將の敵に生拘られて今猶稍村の城に在る
者。主僕十二人あるべ。義成速に和議を容れて其敗將を返しいま。兩國是より
好を結びて唇歯の思ひ成べ。這度に敗きいま。天誅國罰面々。
身に受て子孫斷絶せん。言俳りあるに昭据にして則連署誓文に血を濺ぎ各
征前を折添てまゐらせ。人過ちて改るに憚りなし。兩管領かの如くなる上方荷
擔の諸將孰か遠ん。房州に忠義孝順の人。其義に室町殿も知り給ぬ速に

御義ありて。諸所の敵城を返さゞ。虜に成る敗將ども速に放還さば公私の
幸甚。ゆゝ這度に詮意のごとくば。最も畏に天朝も叡慮安からざる所あり。且
房州再貢献の忠誠と。其八家臣八犬士と唱る者の戰功を叡聞あり。連に御
感のあまり。勅使代秋篠主を添られ。至異の御義あるべと詔れ。義成
喜悅に堪ず謹答るやう。御詮義あり。いとね旦義に義成水陸三路の大敵に當る
とゝども。只防ぐを旨とし。殺伐を好とせざりしに諸隊の壯佼八犬士ども北るを
逐ふ敵の棄る城に据りしも是あり。或は又殺さず生拘へし敵將も多くは只
其暴を懲さん為のみ。久く留むべからずとて。只
めて和を講る者あらば。今に至りいとね然るに天威御武德の過分に恩
命を辱くも。何をか遠背仕らん速に那城を返す。敗將を送り遣ん。臣の情
願ふ所。いまゞ兩管領より和睦の使者あり。誰何と請問へば外廂に

羅列れる。京家の雑掌西三個。遽しく膝を我めて恭しく義成に向ひて。賢侯其義に応ふる休られ臣等は京家の人なれ実は扇谷山内浩我三将の老黨なり。巨田新六郎助友。齋藤左兵衛佐高實。下河邊荘司行包なるぞ。又吾は我が一のこるなれ。千葉の老黨原胤久の弟なる。原赤石介胤輔。長尾の老黨直江荘司。三浦の兵頭水崎蜃人なれも這里に侍り。寡君定正頭定は將軍家の御譴責に畏こて。和睦の御義を仕るとの人どもいまだ賢侯の同意なるべ。否を知ざ。其の故に京家の御使を請まゐりて我が其伴當に打拾て。俱く推参仕りぬ事。機変に似て機変にわらぬ。海容を願まゐる。と異口同様に陳謝ぬ。扨ろ来る素朴の三方托に定正頭定の折て和睦の誓言に白羽の征箭二條載るを助友高実合揚て。義成主に晋呈ば。當下下河邊原直江水崎四老黨。俱に義成に向ひて。額を衝て拝謝しく。和親の使者の

礼を盡せば。熊谷直親執合て。房州疎畧を以日のひそ。両管領諸敗將に管和議をいそぐの故に我其使をねて来れり。と陪話れば義成異議もなく。其義に応いぬと。忽く傍を見かへりて。件の使者に答ふ。憶ざりけるぞ。の通ば義成も亦欲び思へり。和睦の事に別議なし。餘事に後刻談ぜべ。俱に客の間に退たく。後を便宜るべけれと。亟の応に助友等に相欲びて言葉を。知人大士に向ひて。名對面しく且くやう。皇表に両敵厮殺時或に黄昏或に乱軍の中に。面を認られざるべ。汗が中に水崎蜃人の如ぞ。折犬村主に戦に負て。磯真砂と共侶に深庚に堪ぞ身を免かれて。其後河鯉の城に来て在りしかば。今番の使に立られ。口に這漢のなぞ。小磯真砂又許我の近臣望見二郎。品革七郎。又稲戸津衛の従軍なる妻有優萩野井三郎。かの坊本所の戰場を免れ。敢越の片貝に還らば。津衛の安否を知まくわーと。河鯉の城に来て今も猶淹留を。津衛の迎に来つべ者と。昨ら兵

越の怨敵なり。今は虞芮の長隣に倣まるべし。仁義の餘德なるべし。いざ教を願ふのこと。謝されば毛野も信乃親兵衛も。大角莊分現八小文吾も。和談の成りしを祝着せ。斗ゞ中に道節のみ聞ざる如く默然なり。當下義成嘗て鳴りて。誰か存る這六個の使人を客の間に案内をせよと。喚立られて阿と答る。田稅逸左滿呂重時へ次の間より身を起して助友以下の使臣に案内をなして以て退けば迎へ真の雜賞のみ五六名を遣りけり。分程に秋篠將曹廣當。佶と義成に向ひて。房州升進の宣下ありと告れば義成答へ果て。義通と共侶に席を避て拜聽せ。廣當威儀を繕ひて。宣下の趣別紙にあるぞ。天皇詔とのまへく。里見安房守兼上總介源の朝臣。心を好て富とも驕らず。善政仁義に わゝざる者なく。國治りて民親む賢佐多くして。是を以廻に貢献の使者まゐらせく。其忠誠を致せり。再度の及へり。刹又去歲の冬と。二路の大敵をよく防ぎて。

一歩も境に入らしむ。一時に強敵を斃し退けて。國民塗炭を免れり。是偖其家臣。犬士と喚做す者の。智計武勇の羽翼に由れる。其功豈鮮少からんや。夫大功ある者は必重賞を行ふべし。賞罰正かざるとは。賢路窒れ小人時を得て民從はず。去の故に義成朝臣を正四位上左少將とせ。安房守兼上總介故の如し。嫡子太郎義通を從五位下。右衛門佐とす。其父義實朝臣は隱遁既に久しと。創業の武功虛しかるべ。麟兒鳳孫克く其表を嗣ぐに足れり。あをもそ治部卿とす。又其家臣犬江親兵衛なる者は去年京師に使せし時。輒く赤丸を對治して良賊安堵の思ひを做せり。まの故に勅使代秋篠廣當をもて中途に他を追ひ。爵位の宣下あるべく。他亦稟を由りて鮮ひく稟まつらざり。故に今度改て並く其八犬士を從六位の下に叙すべし。且犬江親兵衛仁を兵衛尉に犬阪毛野胤智を下野分に犬塚信乃成孝を信濃分に

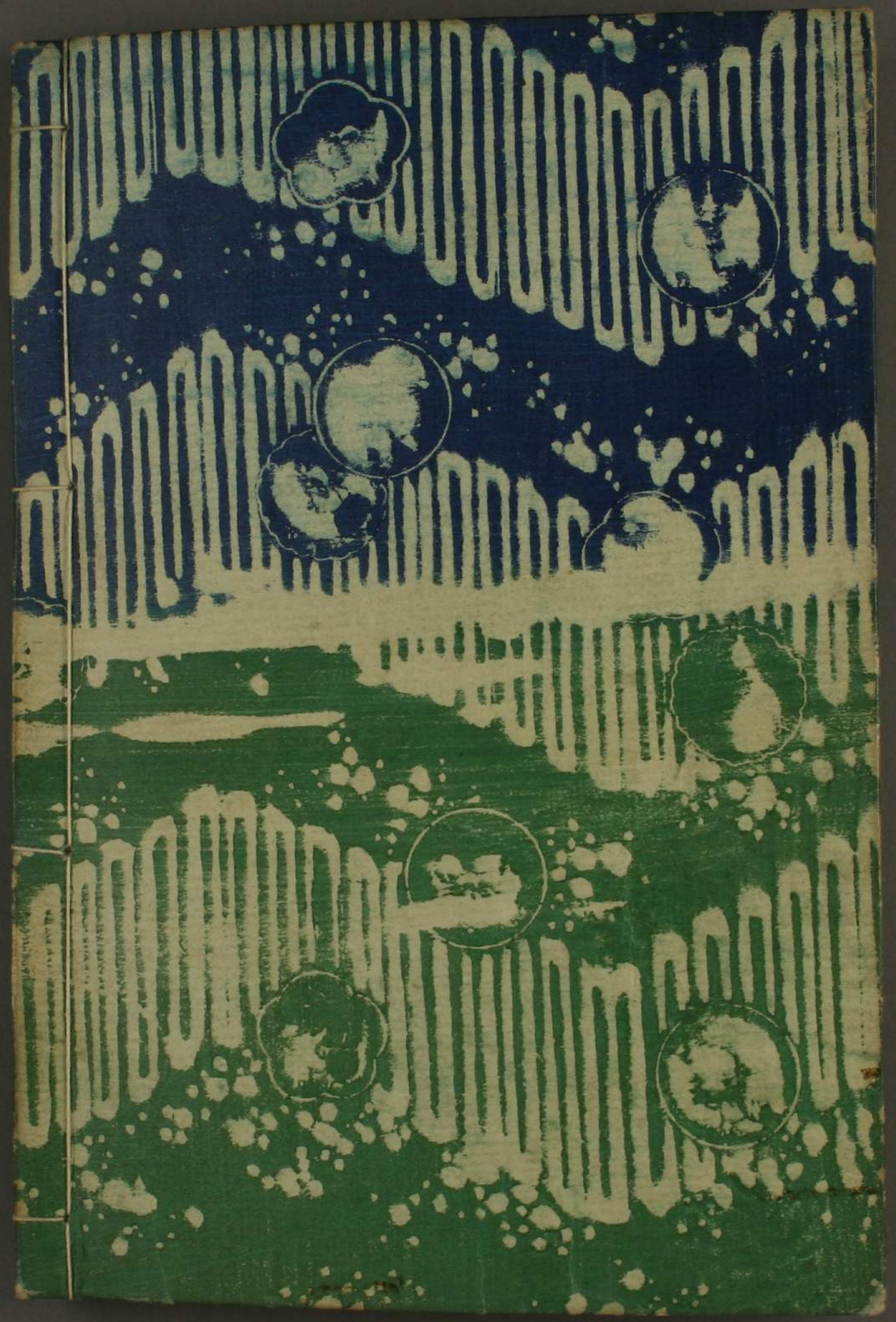
犬山道節忠與を帯刀先生に犬村大角礼儀を大学頭に犬川荘介義任を長狭介に大飼現八信道を兵衛権佐に犬田小文五吾悴頃を豊後介に做る。倶に忠戰大功の朝賞之這義成朝臣美まろりて件の八人に配當まべーと天白王が詔と宣へり是に由りて上卿及大使右少辨参り臨時の除目を行れて勅使代臣廣嵩を遣に安房へ遣されて朝恩を知あらる。這御旨を室町殿に仰合さるべ所へ熊谷生の願へる。御教書もあるべーと備に告げ詳に示と准備の廣蓋に冠烏帽子朝服を幾領も載るを數通の位記と倶に遞與せ又熊谷直親も室町殿の御教書を含て義成主に渡へけり。這時義實老侯の名代る堀内藏人貞行い西家老等と倶に次の間に在りを召れて嵩席に入りて拜聽す。然べ外廂に伺ひ犬士等へ朝賞の過誤に驚駭皆平伏る儘に頭を抬るるるりけり。嵩下義成夫謹で勅答さらく。臣義成

織衣の微功を以て父祖三人家臣某等八人に倶に車爵の勅賞を蒙るべ。今古に例あるべくもいまだ且父義實の如く捨て栄利に心を老病那身に副るの故に名代を以て拜走を是ぞ不敬に何ぞ散位を辱に仕るべ況犬江親兵衛等八人の受領を勿体なー。義成僅に房總二ケ國の守にー。受領の家臣八人わべ非如勅賞るりとても僭上に似て罪免るべくまで物盈る時に必虧く亭午の日輪三五の明月孰か傾を虧ざるべ義成に其盈るを願ぶ盈ぜ虧ぜーく あるべ所のこいそ辭表を献らまく欲を御執成を願ーけまと辭に廣に當り わべ其謙遜に然るるるるー王事監とるー。論言に汗の如ー出て二ども返さるべ。 只義まるるるるるーと諭せ直親も倶にいふやう。昔鎌倉の右大臣朝 居るるー大任を禀まりーより。其身に在國して受領をぬるも勘からぬ。然を いんや戰國割据の今の世に上洛最容易らぬ。何ぞ居るるー受まるを僭

上とのゝ之せんやゝの爰い室町殿の執奏ゐく定められる思ひ賞るゐ丹を強て辭ひ稟さば遁勅の罪を爭何いせん。御兼勿論るべゝと解れて義成脫る路るゝ。沈吟ぎる頭を抬て八個の犬士を見かへりて汝等も兼りつゝん我當惑年查去ねり。といれて犬士等阿とぞかりゐ応て毛野ゐ目を注もれば毛野い夙く心ゐるく。則答稟やう。我君御父子の御栄爵い臣等ゞ願ふ所ゝ然ども思ひ付もゑ。臣等ゞ受領い胸安ゝも縱些の階級ゐりとも君臣ともゐ受領の名わゞ是上を乱ゐゝ這爰ぞかりゐ幾番も只御辭表を願ふのゝとゝゞ親兵衛信乃道節大角莊介現八も又小文吾も共侶ゐ同意のゝをいとまくまるを義成急ゐ推禁めて去ゐて論議い不敬ゝ先兼まりて後ゐゝと諭ゝつ又廣當直親ゐ勅答異爰もゐゝりゝかゞ廣當直親相欽びていよゝひゐりとぞ稱け。然ば次の間ゐ這同答うち受ゐる。両家老諸士の毎憶ども欽びの聲を合せて千歳を唱ぎる者ゐゝけ。

勅答既ゐ果ゝかゞ饗應使大江親兵衛。蜑崎照文等。両御使ゐ案内ゐて。別廳ゐく。盃酒の礼ゐる。犬塚信濃大阪下野。犬村大学。犬川長狹莊介。犬畠後犬山帶刀。犬飼現八兵衛等。両御使ゐ拜見ゝく。受領の欽びを稟ゝゐ。かゝ。是より後も謙遜ゝく。守介尉頭い各省て敢唱ぎ就中忠與義佳い。後々までも猶只道節莊介とのゝ喚せく官名を稱まるゐるゝ。況六位るゐい秘ゝて人ゐ知せねば世ゐい等えぎるゝけり。ゐを是後の詩ゝ低而両家老諸兵頭も両御使ゐ拜謁ゝく。配饌の数待淺かゝぎ給待の吉士入り替り立代り海の美味を盡せる。盛饌いりゐべくもわゞ。最後ゐ義通父ゐ代りて廣當直親ゐ酒盃を薦めて。大刀馬代谷白銀二百枚を牽れる。然い京家の雜掌伴當奴隷ゐ至ゐまで。咸珍饌ゐ飽ざるいる。且折敷さ賜りていよく醉を盡けり。既ゐ七日い頃ゝて。又當席も果ゝかゞ両御使廣當直親い辭て照文等ゐ送られて。俱ゐ旅館へ

退りけり。その日巨田助友齋藤高實下河邊行包原胤輔直江水商等八客の間ゐて鄉食饌の儲ゐゐり。犬阪下野犬塚信濃犬村大学犬川長狹等迭代ゐ出て來て。酒盃を薦むれども。助友等ハ辭ひて多く喫まず。只城遠與の日を定められて退りて准備せまくゐーとゐひけり。既ゐ酒盃納りて又犬塚犬阪ハ共倡ゐ出て來て。件の六個の使人ゐ君命を傳るゆう。和議既ゐ成る上ハ那五人城を返ーて。敗將達を送り遣らんゐ今さゐゐ仔細ゐ問ゐー。那君達ゐ面談ーて。時日を定むべーとゐりーかば助友高實行包等相欣びて商量するゐ。今より六日の後本月二十一日ハ吉日ゐ。その日ゐるべーとて。這義を以答ーかば。二犬士則義成主ゐ宣ゑ上て。件の六個の使人を引て成氏以下の諸敗將ゐ對面を饒ゐける。這段ハ尚長やゐ。亟ゐ盡きべくもゐざれば。又老を更めて。且本回の局末ゐ解分るを聽ねかー。

南總里見八犬傳第九輯巻之四十八終

東海堂蔵